

都市回族コミュニティの維持と宗教実践  
—中国陝西省西安市における回族の帰属意識を  
めぐる民族誌的研究—

今中 崇文

博士（文学）

総合研究大学院大学  
文化科学研究科  
地域文化学専攻

平成27（2015）年度

## 博士論文全体の要約

論文題目：『都市回族コミュニティの維持と宗教実践—中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—』

著者名：今中 崇文（地域文化学専攻）

### 内容の要約

本論文の目的は、中華人民共和国陝西省西安市の回族が、非イスラーム国家である中国において、どのようにして周囲に暮らす漢族をはじめとする非ムスリムと共存しながら、イスラームの信仰とそれに基づいた生活習慣を維持してきたかを、その独特なコミュニティで営まれる宗教実践に焦点を当てて、民族誌的記述から明らかにしようとするものである。

そもそも回族は、周囲に暮らす漢族と共通する言語（漢語）を話し、容貌も漢族に相似しておりながら、イスラームを信仰し、それに基づく生活習慣を維持していることから、少数民族として認定されている人々である。中国全土に散らばって住み、各地で「清真寺」と呼ばれる宗教施設（モスク）を中心に集まり、「教坊」などと呼ばれる独特なコミュニティを形成して暮らしている。

中華人民共和国の成立に伴う各種社会主義政策の推進や近年の急激な経済成長に伴う都市の近代化は、回族の独特なコミュニティの存在をゆるがし、回族の脱宗教化や世俗化を進めているといわれる。漢族との混住の進行、人々を企業や機関、団体に所属させる「単位制」の推進、都市再開発に伴う住居や清真寺の強制移転などにより各地の回族コミュニティが弱体化、もしくは消滅しているという報告が相次いでいる。しかしながら、そもそも都市部に暮らす回族は、それ以前から、礼拝などの宗教実践への参加者も多くなく、信仰への意識が高くないといわれていた。そのような都市部の回族であってもなお、清真寺を中心とするコミュニティへの帰属意識を維持していたのはどのような理由があったのであろうか。本論文はとくに、このコミュニティへの帰属意識に注目し、清真寺とその周辺で営まれる宗教実践を多面的に考察することにより、その帰属意識を維持する仕組みについて解明しようとするものである。

本論文では、第1章と第2章において、西安回族の持つ、個別のコミュニティへの帰属意識にとどまらない、多様で重層的なローカル・アイデンティティについて取り上げた。とくに第1章では、西安回族の歴史を概観し、その起源

を唐代の外来ムスリムとする諸説を紹介した上で、明代における清真寺の建立とともにその周辺にコミュニティが形成されていく過程を明らかにした。さらに、清末から中華民国期にかけての新たな思想の伝来や人口の移動などを経て、教派や出身地といった多様なローカル・アイデンティティを生み出していく経緯を検討した。

さらに第2章では、市中心部に存在する、複数の回族コミュニティを含む大規模な回族集住地域である「回坊」を取り上げ、西安市政府による都市開発計画の変遷と地元回族住民による「牌坊」というゲート状建造物の設置から、この地域が西安回族にとってどのような空間であると認識されているかを検討した。その結果、この地域全体が西安回族にとって自由に信仰を営める空間であるという認識は共有されながらも、日常的にはそれぞれの清真寺を中心とするコミュニティを単位として活動していることを指摘した。

続く第3章では、西安市の中核的な清真寺である、化覚巷清真大寺（以下、清真大寺と略す）を取り上げ、教坊の中心となる清真寺がどのようにして管理運営されているのか、制度の歴史的変遷も踏まえて明らかにした。文化大革命による閉鎖の後、政府とのつながりも深い宗教職能者（アホンという）によって復興された清真大寺は、観光地として開放され、その運営は政治的にも経済的にも極めて安定している。その管理運営制度は、復興を果たしたアホンを中心に、複数の地元出身アホンによって担われている。本来、アホンは流動性の高い人々であるが、清真大寺のアホンはほとんど移動せず、地元に着した存在であることが指摘できる。

第4章と第5章では、清真寺での宗教実践とそこに集まる人々を事例として、清真大寺に帰属意識を持つコミュニティ・メンバーについて検討した。なかでも第4章では、信仰告白や義務の礼拝、ラマダーン月の断食、喜捨、マッカ巡礼といったムスリムにとって義務とされる宗教実践を取り上げた。その結果、とくに1日5回の礼拝と金曜礼拝の参与観察から、清真大寺は地域の中核的な清真寺として、第一義的に、広くムスリム全体に対して開放されている一方で、この清真大寺に特別の帰属意識を有するコミュニティ・メンバーの存在が明らかになった。

さらに第5章では、清真大寺で熱心に宗教活動に参加している有志グループのライフヒストリーから、礼拝への参加者は、高齢者が多く、職業的にも、すでに退職しているか、自営業者などの時間に比較的余裕がある人々が多数を占

めていることを明らかにした。そこからは、若いうちは仕事に専念して礼拝に参加できなくても仕方がないが、時間に余裕ができてから信仰に専念すればよいという意識がうかがわれた。また、参加者の居住地から、必ずしも近隣に住んでいる者ばかりではなく、転居しても、転居前の地域の清真寺との関係を維持する傾向が確認された。しかし、転居にともなって2つの清真寺に帰属意識を持つ者も存在し、清真寺とコミュニティ・メンバーとの関係は永劫不変ではなく、柔軟性や可変性も観察された。

第6章では、西安回族の人生儀礼を事例として、コミュニティ・メンバーの清真寺への帰属意識がどのようにして維持されているかを検討した。西安回族の人生儀礼は、ほとんどの場合、コミュニティ・メンバーの自宅において営まれるが、そこには往々にして自分が帰属意識を持つ清真寺からアホンを招いている。これによって、民族内婚を繰り返し、きわめて錯綜した複雑な親族関係を把握し、たとえ居住地が清真寺から離れていても、清真寺との帰属意識を確認・継承することを可能としている。ただし、葬送については、清真寺で営まれ、コミュニティ全体に参加が呼びかけられる。自宅で営まれる追悼を目的とした「過乜貼（グオニエティエ）」についてもコミュニティ全体への参加の呼びかけは同様で、これらの儀礼を通じて、できるだけ多くの人々に死後の安寧を願ってもらい、来世での復活を果たそうという西安回族の願いが特定の清真寺への帰属意識を維持させる大きな要因になっていることを指摘した。

さらに第7章では、西安回族の年中行事を事例として、個別のコミュニティを越えて存在する、西安回族の多様で重層的なローカル・アイデンティティが維持される仕組みを明らかにした。その際、西安回族の年中行事を、①ヒジュラ暦にのっとって行われる年中行事、②旧暦にのっとって行われる年中行事、の2つに分類し、それぞれに分析を加えていった。その結果、いずれもムスリムとしてのアイデンティティを維持する役割を持ちながら、①の年中行事は、どうしてもおろそかになりがちな日常的な宗教実践を補うものとして特定の清真寺への帰属意識を、②については、西安回族の歴史的記憶を継承し、互いの交流を通じて西安に暮らす回族アイデンティティを維持することにつながっていると結論づけた。

これらの分析から、西安回族の清真寺を中心とするコミュニティは、以下のような仕組みで維持されていると考えられる。ムスリムとして死を迎える場としての清真寺、そしてムスリムとして送ってくれる同胞たちを必要とする意識

とそれに基づいて繰り返し営まれる過乜貼がコミュニティ・メンバーの清真寺への帰属意識を維持させ、それがコミュニティを維持する内的要因となっている。一方で、イスラームの先賢たちを追悼する年中行事によって共有・継承される西安回族としての歴史的記憶が、コミュニティを越えたつながりを維持し、西安回族としての一体性を生み、国家権力や周囲に暮らす圧倒的多数の漢族に対抗することを可能としてきた。そして、これらの儀礼において重要な役割を果たしているアホンに報酬として「乜貼」が渡されることによって、アホンたちの生活が支えられ、コミュニティの中心である清真寺の維持にもつながっているのである。